二人の冒険家による
新たな徐福の東への旅立ち

新徐福東渡

序章　「新徐福東渡」の目的と出航に向けての準備　…… 2
1 二人の冒険家の紹介
2 新徐福東渡プロジェクトの目的は？
3 「新徐福東渡」の文字　水墨画家・崔如琢（ツイルージョウ）氏が揮毫（きごう）
4 「新徐福東渡」Tシャツ　多様なロゴマークの意味は？
5 日本での「新徐福東渡」支援体制

第1章　中国浙江省舟山市から出航　…… 9
1 浙江省船山市嵊泗（ショウスー）島で出航準備
2 出航後悪天候に遭遇

第2章　カヤックボートで九州沿岸を航行　…… 12
1 鹿児島県阿久根市から宮崎県延岡市へ
2 各地の小中高校で海洋環境、日中交流などについて講演

第3章　延岡市到着 歓迎行事とシンポジウム　…… 17
1 カヤックボートが到着・今山八幡宮で歓迎セレモニー
2 徐福伝承国際シンポジウムin延岡

参考　メデイア報道　…… 21

紀元前210年ごろの秦の時代、方士（方術によって不老長寿などを成し遂げようとする修行者）である徐福は始皇帝の命を受け、数千人の童男童女を引き連れ、不老不死の霊薬を求めて、東の海にある仙人の住む島を目指て旅立ち戻らなかったとされている。日本には各地に徐福が来たという伝説が残されており、徐福は稲作などの文明を伝えたとされ、日中友好のシンボルとなっている。

2024年6月3日、デンマーク人のクリスチャン・ハブレヘド氏と中国人の孫海浜（スンハイビン）氏の二人は徐福の航路をたどるため、中国浙江省舟山市を手漕ぎボートで出発し、九州を目指した。目的は人力による日中間航海の実証と、徐福を通じての異文化交流であり、特に若い人たちとの交流により、徐福文化や海洋汚染等の環境問題を知ってもらうためだ。

しかし中国を出発した二日後、逆風で前進できず、潮流により大型船舶が航行する上海方面に流され危険な状況になったため、出発地に引き返した。その後空路福岡に向かい、カヤックボート二隻を調達して九州沿岸を巡り、各地で交流を行い、また各地の学校を訪問して講演を行った。

序章「新徐福東渡」の目的と出航に向けての準備

1 二人の冒険家の紹介

二人は2002年、アフリカから南米へ大西洋5000kmを手漕ぎボートで横断

○クリスチャン・ハブレヘド
（Christian Mourier Havrehed　中国名 黄思遠）
（デンマーク人　54歳）
英国のユナイテッド・ワールド・カレッジ・アトランティック校（UWC-AC）で学ぶ。この学校の理念は、人類愛と人、国、文化の違いを乗り越えた恒久的な平和と持続可能な未来を築くことである。またクリスチャン氏は徐福などの中国の文化に感銘を覚え、イギリスの大学で中国文化、中国語などを学んだ後、中国で20年間働いた。またデンマークはバイキングの国であり、海の冒険を通じて人類愛と国際平和を目指すことを生涯の仕事としてきた。

○ 孫海浜（孫海滨 スン・ハイビン）中国人 49歳
北京体育大学アウトドアスポーツ学科の創設者で現在大学講師。中距離走、マラソン、サイクリング、トライアスロンなどのスポーツマンであり、ボート、サイクリング、ランニングを組み合わせたトライアスロンを中国に根付かせた実績がある。

クリスチャン ハブレヘドさんからのメッセージ（原文は英語）

私は2001年に香港で徐福に関する本に偶然出会って以来23年間、新徐福東渡の航海を行うことを夢見てきました。徐福の物語は私を魅了し、日本、中国、韓国の徐福団体と協力して、世界中で徐福の知名度を高めることができることを嬉しく思います。

日本で徐福の道筋をたどりながら旅をし、美しく特色のある風景を楽しみながら、フレンドリーな地元の人々と交流できることは、私にとって大きな喜びであり、名誉なことです。

人と人との異文化アドベンチャープロジェクトを一緒に行うことで、国際的な理解が深まり、世界が少しでも良くなると信じています。徐福も同じような考え方をしていたと思います。私たちは一緒に、もっと多くのことを成し遂げましょう!

クリスチャン・ハヴレヘド　　www.yantu.com
・デンマークの冒険家　・中国研究者　・ESGアドバケイト(持続可能な社会を築くためにせ界に発信する環境活動家)

計画実行に至るまでの経過

クリスチャンさんは、上記のメッセージにあるような思いで、日本の徐福研究者などと交流し、今回の「新徐福東渡」のプロジェクトを実行した。その経過は次のとおり。

2001年　クリスチャンと孫海浜の二人は、スペインからカリブ海のバルバドス等まで手漕ぎボートで大西洋横断

2009年　クリスチャン氏は新宮市を訪れ元新宮市歴史民俗資料館の故・奥野利雄氏など日本の徐福研究者と交流。

2022年　「新徐福東渡」の準備のため、2022年秋に中国と日本各地の徐福伝承地を訪れ、徐福関係者の理解と協力を求めた。

2023年　手漕ぎボートを中国に発送したものの、中国から出航許可を得られず、2023年の中国からの出航を翌年に延期した。なお出航許可が得られない場合、2024年に日本国内でカヤックボートを手配して「新徐福東渡」を実行することとした。12月にクリスチャン氏は再度日本を訪れ、準備のため各地の寄港予定地を訪れ協力を求めた。

2024年　出航のため中国へ行き、ようやく手漕ぎボートでの出航許可を得て6月3日、中国を出航した。しかし悪天候で危険な状況となったため渡航を断念して中国に戻り、飛行機で来日後、日本国内でカヤックボート借りて、九州沿岸を巡り最終地点の延岡市に到着した。

2 新徐福東渡プロジェクトの目的は？

① 中国から日本へ人力で航海する実証実験

徐福が日本に来たことは歴史として確認されていない。しかし古代渡来人が朝鮮半島からだけでなく中国大陸からも来たことは史実とされている。新徐福東渡で使用されたボートは手漕ぎとはいえ、安全装置、通信装置、航海装置が装備された現代の船であり、古代船の復元ではない。しかし徐福の時代と同じように海流や風の影響を受ける中での人力での航行の再現と言える。

② 徐福伝説、国際理解、平和、海洋環境のアピール。特に若者へ

これが「新徐福東渡プロジェクト」の中心課題となる。クリスチャン氏本人が記した文は以下の通り。

・孫海浜氏と私（クリスチャン）は、中国のヨットなどのウォータースポーツ業界に歴史的な貢献をしたことを誇りに思っている。
・中国の関係機関が私たちを信頼してくれたことを光栄に思い、感謝している。
・私は2001年に、異文化間の海洋冒険を通じて中国。欧州の理解を促進することを使命として、沿途方案（Yantu Project）を設立した。
・中国内外でのプライベートヨットの開放が加速すれば、中国と西洋の理解に大きな効果をもたらす可能性がある。
・国によって政治体制が異なるが、人と人の関係は、どこでも同じだ。
・ノーベル平和賞受賞者のレスター・B・ピアソンが言うように、人々がお互いを理解することが平和の道だ。人々が国ごとに切り離され、相互に学ぶことができないことでは、世界の協力共存はできない。
・人と人との相互理解は、迫り来る気候変動危機の災害的影響を緩和するための鍵となるだろう。私たちは戦争をせずまた気候変動の危機を乗り切る希望を持つためにも、お互いに同じ人間として見る必要がある。

参考　徐福の船はどんな船？

徐福の船はどのような船であったのか？　『史記』には徐福の船に関しては、出航したかどうかも含め記載されていない。しかし当時の船舶がどのようなものであったかは、文献や考古学から推測できる。

武漢理工大学造船史研究センターの席龍飛先生によると、徐福の時代（中国の戦国時代から秦朝にかけて）には、黄河や黄海で大型船による大規模な海戦が行われている。戦争によって船の技術は進歩した。徐福の東渡は秦の国家事業であり、当時の最高水準の船舶が準備されたはずだ、としている。当時の船はすでに帆が利用されていたが、角度を調整しながら向かい風にも対応できる帆ではなく、帆を併用しながらも人力でオールを漕いでいたようだ。多くの童男童女を乗せたとすれば、船も当時としては大型船であったはずで、席龍飛先生はオールの数は40本、漕ぎ手は一つのオールに二人づつ付くので計80人程度だと推測している。なおその後の時代に絵画などに描かれている徐福の船は楼船風であり、これは漢代以降の船をモデルとしたもので、歴史的には異なるとのことだ。

（参考文献：「2012年中国徐福文化象山国際大会」　論文集　「徐福東渡で使用された船舶」武漢理工大学造船史研究センター　席龍飛 著）

筆者注：徐福東渡は歴史的には確認されていないが、考古学では中国大陸からも弥生文化を持ち込んだ渡来人の存在が確認されている。そのときの船の形態などは確認できないが、大規模な組織的な移民ではなく、春秋戦国時代に中国の戦乱から逃れた難民や亡命者だったと推測される。（参考文献　内藤孝幸著『日本人と弥生人』）

3「新徐福東渡」の文字　水墨画家・崔如琢氏が揮毫

崔如琢（Cui Ruzhuo）氏は世界的に高名な水墨画家で、日本でも静岡県伊東市に崔氏の作品を展示した「崔如琢美術館」がある。

崔氏はクリスチャン氏との共通の友人から「新徐福東渡」のプロジェクトの話を聞き、船に付ける文字を揮毫してくださることになった。崔氏は、八十歳に近いが、温厚で知識豊富な紳士ということだ。

この巻物の周辺の余白部分にはその後、デンマークの上海総領事、いちき串木野市長などの要人を始め、今回の新徐福東渡に関係した多くの関係者も署名した。

この書は中国に持ち帰ったあと、オークションにかけるなど、何らかの形で金銭化し、慈善事業に使う予定。

（左から）孫海濱、崔如琢、ｸﾘｽﾁｬﾝ

崔如琢美術館（静岡県伊東市）当館HPより

手漕ぎボート（船の脇の中央に右書きで「新徐福東渡」の文字

４「新徐福東渡」Tシャツ　　多様なロゴマークの意味は？

クリスチャン氏は、中国で「2024新徐福東渡」のTシャツ360枚注文した。これらのTシャツは、日本での中高学生との交流などで、配布された。

Tシャツには「2024新徐福東渡」の漢字を中心としてロゴマークが多数印刷されている。新徐福東渡のプロジェクトに賛同して寄付していたいた団体は合計28あり、財団法人3、学校3、個人10名、企業12となる。そのほか国連の活動目標など、クリスチャン氏が今回の新徐福東渡を通じてアピールしたい世界の活動のロゴも含まれているので、この内容を知ることによって徐福東渡の目的が理解できる。

「新徐福東渡」のTシャツ

① 国連の持続可能な開発目標 SDGs　（The Sustainable Development Goals）

国連は、「すべての人々にとってよりよい、より持続可能な未来を築くため、貧困や不平等、気候変動、環境劣化、繁栄、平和と公正など、直面するグローバルな諸課題の解決を目指す17の目標」を定めた。そのうちの三つの目標のロゴをTシャツに印刷し、それぞれ中国語、日本語、英語で書かれている。

13 気候行動（中国語：気候変動に具体的な対策を）
14 海の豊かさを守ろう。（日本語）
17 PARTNERSHIPS FOR THE GOALS　（英語：パートナーシップで目標を達成しよう）

② アイシー（Eyesea）

Eyeseaは、海のゴミの問題に取り組むために2020年に設立された非営利団体で、世界の海運会社と海運会社から資金提供されている。地球規模の汚染と海上災害のデータを収集および分析して地図化することを使命とする。ゴミの性質等を考慮して、どのエリアを優先的に清掃すべきか、およびそれをどのように行うのが最善かを分析し、この情報は組織やコミュニティに渡され、実際の海のクリーンアップに利用されている。

③　NGOアトランティックパシフィック（Atlantic Pacific）

（Atlantic Pacific in Japan　ホームページを要約）

アトランティック　パシフィックは、海の安全の使命を持つ国際的な組織で、日本では、2011年の津波から復興する地域社会を支援するための組織が始まりで、釜石市の根浜湾にある。

世界各地に拠点をつくり、春と夏に宿泊型学習プログラムにより教育訓練を行い、若い生徒たちに海の安全や他のライフスキル（社会の中で自立し、より良く生きていくためのスキル）を教えながら、世界中から新しい友達を作る機会を提供している。

参加者たちが地球規模の問題への解決の糸口を見出す力をつけることに重点を置いている。

活動の一例

・サーチ＆レスキュー
・ライフボートの体験
・応急処置、災害対応と復興
・漁業体験、遊泳、セーリング
・海の再生とプラスチック防止
・国連持続可能な開発目標（SDGs）

徐福環境奨学金のポスター

徐福環境奨学金

クリスチャン氏と孫海浜氏は、今回講演を行った学校の生徒から２名を2025年岩手県釜石市で行うアトランティックパシフィック海洋環境安全の研修に招待する予定。

Atlantic Pacific　HPより

④ カリフォルニア大学サンディエゴ校のスクリップス海洋研究所

海洋プラスチック問題

この海洋研究所は、1903年にカリフォルニアのラホヤに設置された世界最大規模にして最古の地球科学と海洋の研究組織であり、学部生や大学院生の指導を行っている研究機関。

レジ袋のようなプラスチックが投棄されると、分解されて小さな5mm以下のマイクロプラスチックとなり、それが海洋の魚等に取り込まれ環境問題となっている。プラスチッ

ク問題は国際的な問題とされている。2022年の国連環境総会での決議に基づく「プラスチック汚染防止条約策定のための政府間交渉委員会」が2024年11月末から韓国釜山で開催された。しかし生産規制に関する条文を設けることに反対する産油国との間の溝は深く、条文案の合意に至らなかった。

次の記事は、国立研究開発法人である海洋研究開発機構が行った調査の記事。

毎日新聞デジタル　2024/8/29（最終更新 11/1）一部抜粋

房総半島沖に微小プラの「ホットスポット」　深海に年2.8万トン

房総半島沖の深海に年間推定2万8000トンものマイクロプラスチック(MP)が沈んでいるとの観測結果を、海洋研究開発機構の研究チームが明らかにした。房総半島沖は日本近海に流れ込んだプラごみがたどり着く終着地点の一つとされる。太平洋の深海に降り積もるMPの重量が観測によって明らかになるのは初めて。

MPは直径5ミリ以下の微小なプラ粒子。プラ製品の使用中に劣化などで発生したり、川や海に流れ込んだプラごみが紫外線や波の作用で小さく砕かれてできたりする。MP自体はとても軽いが、プランクトンの死骸などに付着して深海へ沈んでいく。

研究チームは、黒潮が房総半島から東へ離れる一帯に広がる「黒潮続流再循環域」という海域の水深4900メートルにMPの捕捉装置を設置。2014年7月～16年10月、装置内に降り積もったMPを回収し、時系列で詳しく分析した。この海域は日本近海のMPが流れ着く「ホットスポット」の一つとされる。

その結果、1平方メートル当たりに1日平均352個のMPが降り積もっていた。全体の90%を0・1ミリ以下の小さな粒子が占め、ポリエチレンやポリアミドなど17種類の異なる材質が見つかったという。　（以下　略）

マイクロファイバー（microfiber　極細合成繊維）

ところでマイクロプラスチックの一種として、マイクロファイバーがあり、新たな問題が提起されている。スクリップス海洋研究所のディミトリ・デハイン（Dimitri Deheyn）博士は、クラゲを顕微鏡で研究していたところ、今まで見たことのない長い青い糸状のものを発見。それはマイクロファイバーであり、海洋生物がマイクロファイバーに汚染されていることが明らかとなっている。

マイクロファイバーは、1ミリの1000分の8以下の太さの繊維で、吸水性、速乾性、柔軟性、保温性などの優れた性能を持ち、ポリエステルやナイロン，アクリル繊維があり、衣服などの原料となっている。これらの衣類を洗濯するとマイクロファイバーが流出し、下水道の排水処理を行った汚泥に、マイクロファイバーが含まれる。世界各国で下水道汚泥の一部を肥料としてと利用しているが、日本でも令和4年9月9日に開催された食料安定供給・農林水産業基盤強化本部では今後の検討課題の一つに、下水汚泥等の未利用資源の利用拡大が掲げられた。（国土交通省ＨＰによる）　肥料とともに畑にまかれたマイクロファイバーは雨水とともに流出し、海洋汚染につながるとの指摘があり、上記のとおりすでに海洋生物に影響が出ている。

クリスチャン一行は中国から日本への航海は、悪天候のため途中で中国に引き返したため日本までの海水の採取はできなかったが、途中までの海水を採取し、分析のためにクリップス海洋研究所のデキン博士に送った。採水サンプルは多くはないが、東シナ海のマイクロファイバー汚染の状況について貴重な資料となるだろう。

５日本での「新徐福東渡」支援体制

「新徐福東渡」を日本側で支える組織は既存の組織があるわけでなく、偶然にホームページなどで新徐福東渡の計画を知った方々が急遽チーム「徐福Japan」を組織したものだ。オンラインで議論を重ね、新徐福東渡のプロジェクトを支えた。

また延岡でのシンポジウムなど一連の行事は地元の徐福組織である「延岡徐福伝説伝承会」が中心となり、延岡市の団体や行政の協力、支援があった。途中の寄港地の鹿児島県いちき串木野市でも市長を始め支援をいただいた。

○チーム・徐福Japan　「新徐福東渡」を日本側で支えるチーム

・本間修二：合同会社オフィスホンマ代表社員　元TBSビジョンのエグゼクティブ・プロデューサー　宮崎市在住。今回のプロジェクトでは、単に地元の宮崎県内の対応を行うだけでなく、専門的な立場で全体のプロジュースを行っていただいた。

・内山香織：国際写真家、海外及び国内の文化研究家、徐福研究家
デンマークでの文化活動でクリスチャンさんと知り合い、「新徐福東渡」の計画を筆者（伊藤）に伝えてくれた。クリスチャンさんとの連絡調整や企画に尽力していただいた。

・諸富裕典　クリスチャン氏のイギリスでの高校時代の友人。現在ラオスのビエンチャンで仕事。英語、中国語の通訳として参加したが、それ以上に豊富な海外でのビジネス、ボランティア活動経験からのアドバイスは貴重なものであった。

・伊藤健二（この報告書の筆者）元日本徐福協会事務局長　元神奈川徐福協会事務局長

・黄子涵（通称Miya）
中国（北京・香港）、スイス（チューリッヒ）に在住経験
現在、東京大学の博士課程1年生（大気海洋研究所）
クリスチャン一行の日本到着後、ボートの進行に陸上で車で随行して支援した。英語、中国語の通訳を兼ねたアルバイト案内役だが、東京大学の大気海洋研究所の研究生という専門家でもある。日々発信したInstagramは内容が詳しくて面白く、画像も工夫してあり、この報告書でも彼女が作成した画像や文章を多く使わせていただいた。

・松平隆宣　音楽と映画関係の仕事を行い現在ベルリンでワーキングホリデー中。今回、ドライバー、撮影、事務処理を務め、カヤックの運行を陸上から支援した。

・小野 岳　カメラマン。今回動画撮影等の記録を担当。

○いちき串木野市

鹿児島県のいちき串木野市は、「新徐福東渡」の通過地点となる。鹿児島県北西部の東シナ海に面している。「いちき串木野」の地名は市来町と串木野市が合併したことによる。当市には、徐福が冠嶽に冠を埋め、熊野に向かったとの伝説があり、日本一の大きさを誇る徐福像がある。

今回の「新徐福東渡」に対して、いちき串木野市は、神村学園での講演会などを手配していただき、また中屋市長は延岡市で開催された国際シンポジウムにも来ていただいた。

○ 延岡市

「新徐福東渡」の終着地である延岡市は、数々のイベントを実施した。7月5日はクリスチャン一行の上陸歓迎式典、来航記念碑の設置、富岡小学校での「こども・市民交流集会」。翌6日は「徐福伝承・国際シンポジウム」を開催した。イベントは延岡徐福伝説伝承会、延岡商工会議所、延岡観光協会、延岡岡富地区区長会、宮崎県北日中友好交流推進会、延岡市立岡富小学校、延岡市商店会連合会、今山八幡宮、今山大師、延岡青年会議所の協力など全市あげての体制で参加していただいた。この中で中心となって動いていただいたのは延岡徐福伝説伝承会の森憲一事務局長で、各団体への協力、協賛の取り付け、市の補助金申請、会場の予約、学校交流の交渉などなど各方面に足を運んでいただき、イベント実現の原動力となった。またチーム・徐福Japanの中心的メンバーである本間修治氏は、宮崎市在住であるが、延岡のイベントに対しても大きな関わりを持っていただいた。　なお延岡でのイベントの詳細は第３章（16ページ）参照

第１章　中国浙江省舟山市から出航

1.舟山市嵊泗島で出航準備

ボートの出港地は浙江省舟山市だ。舟山市は寧波市の沖にある舟山群島で構成され、中心地は舟山島であるが、群島内には中国四大仏教名山の一つとなっている普陀山があり、また徐福が立ち寄った伝説がある岱山島もある。岱山島には世界一大きいとされる徐福像が建っている。「新徐福東渡」の船が出航するのは舟山列島の嵊泗県だ。2024年5月12日　二人は北京から舟山に移動し移動した。実はこのときまだ中国当局から出航許可は得られていなかった。しかしクリスチャン氏たちが交渉し、中国当局の理解が得られ、ようやく出航が認められた。

東渡の出港式

5月18日舟山市嵊泗県で、出航式が行われた。背景のスクリーンには「中国－デンマークの探検家が再び手を携える。孫海浜と黄思遠の手漕ぎボートの東渡出港式」とある。

5月25日は出航予定日であり、この日はデンマーク総領事夫妻も出席し進水式を行った。しかし天候が悪く、前線が通過するのを待ったため出航は大幅に延びた。

舟山群島

２　出航後悪天候に遭遇

６月３日　出航。波は穏やか。

中国を出発してから約6時間後、通りがかった船の船員が手漕ぎボートを見て驚いて声をかけてきた。この様子は船の船員が撮影しており、中国の動画（抖音Douyin)にアップロードされた。

船員A:あ、あれは何だ。彼らは助けを必要としているのだろうか。

船員B: ボートにエンジンははあるのか!

船員A:エンジンはないようだ。ただ漕いでいるようだ!

船員B:ここまで漕いできたのか?

通りがかった船から撮影された動画

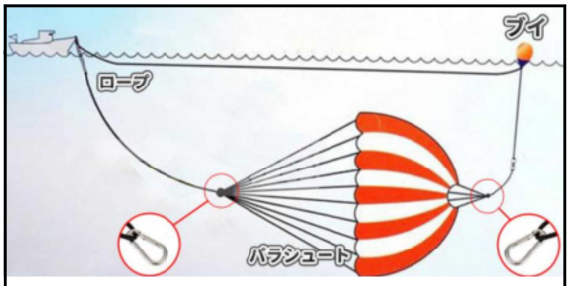
船員A:よく見てみろ！　彼らは手で漕いでいる。すぐに疲れて漕げなくなるだろう。　おーい、どこまでいくのだ？
孫海浜:日本の長崎まで漕いで行きます!
船員A:どこから出発したのか?
孫海浜:嵊泗島から!
船員A:それはそれは。安全に注意しろよ！

参考：航海中の水の確保
航海中必要な水は、海水の淡水化装置を用いるが、海水中に泥分などが含まれると浸透膜が目詰まりを起こし使えなくなる。東シナ海沿岸は長江の泥分が含まれているので、河口から離れた海でないと使えない。

6月4日　中国から12マイルを越え、国際水域に入り、イルカと遭遇した。自動船舶識別装置（AIS）をオンにし、ボートの位置を追跡できるようになった。また、ドローンのテストも行った。

出航の日を6月上旬を選んだのは、例年この時期には風向が東風から西風に変わり順風となるからだ。しかしこの年は風向の変化が異常に遅かった。航海初日は向かい風であったが、風が弱かったので順調に西に進んだ。しかし二日目の6月4日には風が強くなり、二人は手に豆ができるほど漕ぎ続けたが全く進まなかった。

そのためしばらく海上に留まることとしたが、水深が深い海上では通常のアンカーが使えず、パラシュート型の漂流アンカーを使った。しかしこの付近の潮流は西北方向に流れているため、風だけでなく潮流に流され、次ページの図で示すように、中国の上海方面に流されて行った。



漂流アンカーの図（メーカーHPより）

漂流アンカー

荒波に難航するボート

予定航路と実際の軌跡（Miyaさん Instagramより）

計画では中国舟山市の嵊泗（ショウスー）島から長崎県に航海の予定であったが、二日目に向かい風の強風のため漂流アンカーで停泊した。しかし風と潮流により北西の上海方面に流されて行った。上海に近づくにつれて、上海港に出入りする大型船舶の数は増え、衝突の危険度が増した。そのため、二人は今回の航海を断念し、中国の関係機関に連絡し救助され、ボートも曳航され、嵊泗（ショウスー）島に戻った。

中国の救助船に曳航されるボート

参考 2001年の大西洋横断と、今回の東シナ海渡航計画の比較

距離は短いが、気象状況は厳しい（参考文献　China Daily.com 2024-05-25）

2001年、黄思遠（クリスチャン）と孫海浜の2人は、スペインからカリブ海のバルバドス島までの大西洋5000キロを56日間かけてボートで横断した。彼らは大西洋を横断した最初のデンマークと最初のアジア人となり、このとき寄付金91,000ドルを集めて、英国で学ぶ中国人学生のための奨学金に寄付した。航海後、孫海濱と黄思遠は、将来太平洋に東に漕ぐことを約束し、今回それが実行に移された。

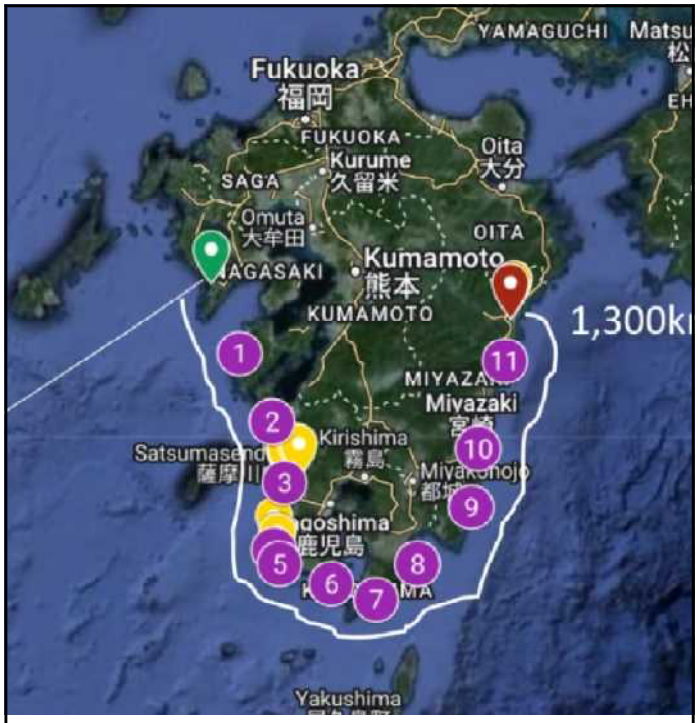
中国の舟山から日本の長崎までは800キロメートルで六分の一の距離だ。大西洋の横断航路は気候が安定し、風や海流が良い地域であるが、今回の舟山から長崎に至るルートは安定した天候は望めず、海流も不安定だ。それでもこの時期は西風に変わる季節なので、6月上旬の時期に出航する計画とした。しかし前述のとおり悪天候のため日本への航海は断念した。

第２章　カヤックボートで九州沿岸航行

鹿児島阿久根市から宮崎県延岡市へ

1.鹿児島県阿久根市から宮崎県延岡市へ

新徐福東渡プロジェクトの目的は二つあり、一つは中国大陸から日本の長崎まで800キロメートルを、手漕ぎボートという人力で航海するという実証実験。もう一つは日本に到着後、このボートで九州沿岸500キロメートルを巡り、各地で交流することだ。中国から日本への人力航海については、悪天候のため断念したが、もう一つの目的である九州沿岸を航海し交流するため、日本でカヤックボート二艘を調達した。



計画航路

沿岸各地で、世界の平和と友好を目的として沿岸各地の徐福伝承地などで地元の徐福研究者などと交流した。また海の汚染などの海洋の問題を若い人たちに啓蒙するため日本各地の小中高の学校へ出向き生徒と交流し、海洋汚染問題などの海の問題を啓蒙を行った。

実は中国からの出航許可が難航し中国からの出航が危ぶまれていた時点では、中国からの直接渡航をあきらめ、日本国内でカヤックボートで巡ることも考えていた。今回手漕ぎボートによる渡航ができなかったため、結果的に中国での出航許可が下りなかった場合に想定したカヤックボートでの航海となった。

カヤックと伴走車　（鹿児島県阿久根市）

右上の地図は、当初計画の中国からボートで長崎到着し、その後九州各地を巡り最終地の宮崎県延岡市に向かう航路だ。しかし計画は変更され、陸路で鹿児島県阿久根市に向かい、カヤックボートはここからスタートした。 福岡からは、陸上支援チームが合流し、車の運転、ドローンなどによる記録、宿泊などの手配、通訳を行った。

右の写真は左から孫海浜、黄子涵（ホアン ツーハン）（通称Miya)、松平隆宣 、クリスチャン。

支援チームと合流

6月18日　二人は鹿児島県阿久根市からカヤックボートで航海に出発した。50キロ離れたいちき串木野（くしきの）市に向かったが、数時間後、風速は5級、波の高さは2～3メートルに達し、激しい波となった。このような状況では海上カヤックは非常に危険であり、行程を短縮せざるを得なくなった。16キロ進んだところで上陸し、陸上の支援チームにより車でいちき串木野市に向かった。

6月19日　一行はいちき串木野市役所を訪問した。
いちき串木野市には、徐福が冠を埋めたという冠嶽がある。ふもとには日本一大きい徐福像が像が建っている。毎年四月にはこの徐福像に花の冠をかぶせる「花冠祭」が開催され、神事と市民向け芸能大会などが開催される。今回いちき串木野市は新徐福東渡の活動に協力していただき、中屋市長は7月6日に延岡市で開催されたイベントにも参加していただいた。(21ページ　メデイア報道参照)

いちき串木野の日本一大きい徐福像

鑑真上陸地　南さつま市

クリスチャン一行は鑑真が上陸したとされる鹿児島県南さつま市坊津町秋目に立ち寄った。ここは徐福の伝承地ではないが、日中関係史で重要な地点だ。

唐の高僧である揚州の鑑真は、聖武天皇の求めに応じて日本へ渡る決意をした。しかし中国政府の許可を得られずたびたび密出国を企て、748年、舟山諸島（今回の新徐福東渡の出港地と同じ）から出航したが、風に流され中国海南島に漂着した。過酷な環境のため、鑑真は海南島から揚州に戻る途中に失明。それでも753年、日本の要請により鑑真は中国からの帰りの遣唐使船で日本に向かう。四隻の内一隻は行方不明、一艘はベトナムまで流されるが、鑑真の乗った船は薩摩国に漂着した。

遣唐使の時代でも日中間の航海は命がけであったが、この時代から約千年前の徐福の時代の航海はさらに困難だっただろう。13年前の2011年２月、当時の駐日大使程永華氏も日中友好の先賢をしのぶため、この地を訪れ植樹した。(右の写真参照)

その後一行は南さつま市の坊津秋目、佐多岬を回り、宮崎県の都井岬や青島などを経由し最終地の延岡を目指した。

鑑真記念館の鑑真像（鑒は鑑の異字体）

元駐日大使程永華氏（中国大使館HPより）

2.各地の小中高校で海洋環境、日中交流などについて講演

前述のとおり、今回の「新徐福東渡」の目的の一つに、日本の若者との交流を行い、徐福伝説、日中文化交流、国連の持続可能な開発目標に関連した海洋汚染問題の提起などを行うことがある。その具体的な実践として、クリスチャン一行は各地の学校の生徒との交流を行った。

講演の内容は次のとおり

・手漕ぎボートで中国から日本に渡るという冒険。
中国を出発して二日後に風と波が強くなり、荒波の中で必死に二人がボートを漕ぐ動画は迫力があり、生徒たちから歓声があがった。

・徐福伝説と日中交流に関して
各地の徐福伝説や鑑真などの日中交流の歴史

・海の環境問題　（これが講演の主題）

海洋のプラスチックごみなど、具体的な汚染問題や気候変動について、国連の持続可能な開発目標　（SDGs）（5ページ参照）などの説明を行った。

講演は講師から一方的に話すのではなく、クイズ形式で生徒たちに問題を出し、正解した場合、5ページのTシャツをプレゼントした。話の内容も面白く、後のページの写真にあるように、大いに盛り上がった。説明は英語と中国語だったが、黄子涵（ホアン ツーハン）さんの三カ国語の通訳も見事であり、また通訳としてだけでなく、東京大学大気海洋研究所の研究生という専門的立場であり解説者としての役割も果たした。

訪問した学校

①　神村学園（いちき串木野市）　　6月19日

神村学園はいちき串木野市にある小・中・高等学校、専門学校を運営する学校法人。2024年の高校野球では準決勝まで戦ったので全国的に知られている。

神村学園での講演

講演で盛り上がる。

②　聖心ウルスラ学園聡明中学校（延岡市）　　7月4日

聖心ウルスラ学園は、ウルスラ宣教女修道会を設立母体として昭和30年に設立された。当初は女子校であったが、現在は共学となっており、野球部は春夏通算2回の甲子園出場を果たしている

聖心ウルスラ学園聡明中学校での講演

聖心ウルスラ学園聡明中学の生徒たち

③ 延岡学園尚学館高等部（延岡市）7月４日

延岡学園は1951年に延岡高校経理学校の設立から始まり、その後中等部の設立、小学校の設立を経て、現在は小中高の一貫校となっている。

延岡学園尚学園高等部での講演

④延岡市立岡富小学校　こども・市民交流会　7月5日

上陸した5日の午後、延岡市立岡富小学校で、「新・徐福東渡」延岡来航記念こども・市民交流集会」が開催された。他の学校とは異なり、延岡での一連の行事の一環として開催され、また対象も小学生だ。講師陣にはクリスチャン氏、孫海浜氏、黄子涵氏に加え、静岡県立大学の民俗学准教授の達志保氏が参加した。今までの高校生とは異なる雰囲気であったが、子どもたちは話に興味を持ち、積極的に質問に答えていた。

岡富小学校（21世紀の徐福さんと童男童女）

第３章　延岡到着 歓迎行事とシンポジウム

1.カヤックボートが到着　今山八幡宮境内で歓迎セレモニー

延岡市五ヶ瀬川を遡り延岡市中心地に上陸

今山八幡宮へ歩いて移動

7月5日朝、二人のカヤックボートは、延岡市に到着した。延岡では、延岡徐福伝説伝承会が中心となり、「新・徐福東渡来航 来航記念イベント実行委員会」を組織し、5日と6日、市内で各種のイベントが開催された。

朝10時、二艘のカヤックボートは五ヶ瀬川を海から遡り、板田橋と亀井橋間の右岸に到着した。上陸後、歓迎セレモニーが行われる今山八幡宮境内で行われる歓迎セレモニーに向かうため、二人はカヤックボートを携え、関係者とともに徒歩で延岡の街中を歩き、セレモニー会場の今山八幡宮に向かった。

今山八幡神社は、周辺の摂社を含め広大な敷地を有する。（マピオン地図を加工）

歓迎セレモニーと記念碑の序幕（今山八幡宮境内）

一行は上陸地から今山八幡宮境内まで徒歩で来場。はじめに小学生の音楽隊の演奏で迎えられた。

その後、新たに作成された「新徐福東渡」の記念石碑の除幕式が行われた。

小学生の楽隊による歓迎を受けた後記念撮影

今山八幡宮一体の小山は、かって蓬莱山といわれており、現在は地名としては残っていないが、近くの寺の山号が「天台宗蓬莱山善正寺」となっている。

今山のふもとに富岡小学校があるが、かってここに徐福が船を繋いだとの伝説がある「徐福岩」があり、現在富岡八幡宮の境内に再現されている。

また今山の頂上付近に1839年、疫病退散のために建立された今山大師の寺があり、日本一の高さと言われる17ｍの弘法大師銅像が建っている

「延岡来航記念碑」（右下）背景は徐福岩(右奥)と徐福像（中央）

延岡来航記念の石碑

石碑の内容は、中央に「新徐福東渡」の文字が秦代（徐福の時代）の漢字で書かれ、この文字は中国の高名な水墨画家である崔如琢氏が揮毫したもの。石碑の上部には、中国浙江省象山市から延岡市に来たことが刻まれ、下部にはデンマーク人のクリスチャンハブレヘド及び中国人の孫海濱の二人の名前と、日付（２０２４年7月5日）、設置者の「延岡徐福伝説伝承会」の名称が刻まれている。石碑は7月5日の歓迎セレモニーで披露され、その後岡富小学校の校庭に設置された。

徐福が船を繋いだという伝説の「徐福岩」は、現在の岡富小学校敷地のあたりにあったとされ、この石碑はこの徐福ゆかりの地に設置された。

2. 徐福伝承・国際シンポジウムin延岡

時間　7月6日　14：00～16：30
場所　延岡市総合文化センター小ホール
主催　延岡徐福伝説伝承会　新徐福東渡来航記念イベント実行委員会
協力　延岡商工会議所　（一社）延岡観光協会　延岡岡富地区区長会
宮崎県北日中友好交流推進会　延岡市立岡富小学校
延岡市商店会連合会　今山八幡宮　今山大師　（一社）延岡青年会議所
後援　延岡市　延岡市教育委員会　いちき串木野市　NHK宮崎放送局　MRT宮崎放送
UMKテレビ宮崎　ケーブルメデイアワイワイ　宮崎日日新聞社
夕刊デイリー新聞社　日本徐福協会
総合司会　松田祐子（FMのべおか/パーソナリティー

第１部　講演
○ 基調講演：「東アジア友好のシンボルとしての徐福」
逵志保（民俗学者・静岡県立農林環境専門職大学准教授・日本徐福協会会長）
○ 日･中･丁パネルトーク「海洋冒険家から見た徐福之魅力と不老不死研究の最先端
（登壇）・クリスチャン・ハブレヘド（デンマーク冒険家、海洋環境活動家）
・孫海浜（元北京体育大教授・冒険家）
・黄子涵（東京大学総合文化研究科国際環境科学専攻・大気海洋研究所）
（司会）森山慎作（延岡徐福伝承会副会長）
○ 特別講演：「九州古代における徐福の影響」
濱田博文（鹿児島大学名誉教授・医師・歴史研究家）

第２部　パネルディスカッション
（徐福伝承を次世代に語り継ぐ!!
九州古代史としての地域創生のコンテンツになりうるか）
登壇者　･浜松泰宏（延岡観光協会事務局長）　･榎本雄介（延岡商工会議所青年部直前会長）
･逵志保（民俗学者・日本徐福協会会長）　･赤崎敏男（日本徐福協会事務局長）
･伊藤健二（元日本徐福協会事務局長）

ファシリテーター/本間修二（合同会社オフィスホンマ/プロデューサー）

来賓及び主催者あいさつ
・いちき串木野市長　中屋謙治
・延岡市商業観光文化部長　河野修一
・延岡市観光協会　盛武一則
・延岡徐福伝説伝承会　会長　植田恒雄

中屋いちき串木野市長

河野修一部長

盛武一則会長

植田恒夫会長

達氏講演（民俗学者）

日･中･丁パネルトーク

濱田氏講演（医師）

パネルディスカッション

シンポジウム会場で（徐福と始皇帝）

ボート到着日（7月5日）夜に行われた歓迎会出席者

シンポジウム(7月6日）関係者

延岡の徐福伝説→
(徐福さん振興会は現在の
延岡徐福伝説伝承会)

「徐福さん」伝説とは?

延岡市には、紀元前二百十九年、秦の始皇帝の命を受けた「徐福」が、三千の童男女と医・工・農など百の技術者を伴い、不老不死の仙薬を求めて蓬莱山（現在の今山）にたどり着き、同時に大陸文化を初めて日本に伝えたとされる「徐福岩伝説」があります。

「徐福」はその意味では日本文化の礎を築いた人であり、日本人の源であり、また「健康」「長寿」の神とも言えます。

私たちは、このような「徐福さん」を健康で快適（ゆったり・あったか）な生活を送るための守り神として語り続けます。

徐福さん振興会

参考：メデイア報道

① 南日本新聞

徐福伝説たどる旅

デンマーク冒険家来訪

秦の時代の中国から渡来した伝説が日本各地に残る方士徐福に関し、国際シンポジウムが7月、延岡市で開かれる。この場で講演するデンマーク人冒険家らが19日、伝説の地を巡る一環でいちき串木野市

□いちき串木野□

を訪れた。

クリスチャン・ハブレヘドさん(54)が、中国人で大学講師の孫海濱さん(49)とともに訪問した。当初は徐福になぞらえて中国から手こぎボートで海を渡る予定だったが、逆風で漂流して断念。飛行機で来日後、各地を巡っている。

いちき串木野市には、徐福が秦の始皇帝の命で不老不死の薬を探したと伝わる。市役所で2人は、冠をささげたとされる冠岳などについて職員と意見を交わした。ハブレヘドさんは「この冒険で徐福を広く知ってもらい、国際文化交流を活発にしたい」と話した。（鶴園悠太）

徐福の足跡をたどる旅について話すクリスチャン・ハブレヘドさん＝いちき串木野市役所

いちき串木野市役所を訪問（南日本新聞）

②夕刊デイリー　7月19日

夕刊デイリー　2024年（令和6年）7月19日（金曜日）

徐福伝説 伝承の地をたどる

冒険家2人 延岡で市民らと交流

伝説生かして観光誘客

国際シンポ、可能性探る

③ 朝日新聞デジタル　7月15日

「徐福伝説」追って延岡へ　海洋冒険家2人が到着　市民と交流も

星乃勇介2024年7月15日 10時30分

不老不死の仙薬を求めて中国から日本に渡ってきたという「徐福」の伝説を追って、手こぎボートで南九州沿岸を旅した海洋冒険家2人が5日、目的地の宮崎県延岡市に到着し、市民の出迎えを受けた。

デンマーク人のクリスチャン・ハブレヘッドさんと中国人の孫海浜（スンハイピン）さん。かんかん照りの中、市内を流れる五ケ瀬川をシーカヤックでさかのぼり、市役所近くの河原に接岸。待っていた20人ほどの市民らから大きな拍手を受けた。

手こぎボートで延岡に到着した海洋冒険家2人
2024年7月5日午前10時0分、延岡市北町2丁目、星乃勇介撮影

2人はそのまま、徐福一行が上陸する際に綱を結んだという「徐福岩」のある今山八幡宮へ。ハブレヘッドさんは「伝説をなぞることで、古来の日中韓の交流を実証したかった」、孫さんは「多くの人に徐福のことを知ってもらい、中国から観光客が来るきっかけにしたい」と話した。

主催者側によると、2人は東シナ海を手こぎで渡る計画だったが、悪天候のため断念し、飛行機で来日。鹿児島県いちき串木野市、南さつま市など徐福伝説が残る街を訪問し、市民と交流を重ねてきた。

延岡の観光関係者も徐福伝説を外国人の誘客に生かしたい考え。2人の来日を受け、6日に市内で伝説を巡る国際シンポジウムを開いた。

手こぎボートで到着した海洋冒険家2人
2024年7月5日午前10時3分、延岡市の五ケ瀬川、星乃勇介撮影

新徐福東渡　2024年12月8日発行

発行責任者　チーム徐福Japan 伊藤健二（xufuito@jcom.zaq.ne.jp）